公益財団法人前川財団2022助成事業

続（ぞく）ふるさとのいろあそび

やりたいあそび・たのしいあそび
そして、ひろがるあそび

「地域の色・自分の色」研究会

（「ちいき の いろ・じぶん の いろ」けんきゅうかい）

実　践　別府大学明星幼稚園
真愛幼稚園
ふたばこども園
国東市立安岐中央幼稚園

監　修　秋田喜代美

この本を手に取った方に

「地域の色・自分の色」研究会は2014年に立ち上げ、「色」という視点から、地域の素晴らしさとそこで生まれ育った自分の良さを再発見することを目的に活動しています。

その中で、2020年度に、学校や園で検証実践を行いながら、「色」探しから身近な自然や歴史文化に関心を向ける入門教材「ふるさとのたからもの」を作成いたしました。

2021年度には、その実践の中で子どもたちが見つけた不思議を、「色」の違いや変化等から解き明かす探究教材「ふるさとのふしぎ」を作成し、幼稚園での実践は、「ふるさとのいろあそび」として、実践記録にまとめました。そして、2022年度には、地域と地域は、大地の営みを通して、繋がっていることを、「色」の違いや変化から、解き明かしていく学習材「ふるさとのだいち」を作成し、QRコードで研究会HPと繋ぎ、学習コンテンツに動画を取り入れてみました。

※教材館は
こちらから

これらの教材は、県立図書館、別府市立図書館や国東市立図書館(4館)、別府市の全市立幼稚園や小中学校、国東市の関係幼稚園や小学校の図書館などに置き、関係幼稚園や小中学校で活用に向けてのアンケート調査も実施いたしました。

その結果、「総合的な学習や地域学に活用できる」、「興味から入門し、探究に繋がる教材」など、高い評価を受け、血の池地獄「こども色博物館」のアンケート調査でも、「良い取り組みです」「こんなことができるあなたたちがうらやましい」などといった励ましの言葉も全国からいただきました。

そして、「地域の子どもたちに広げて、継続し、子どもの主体的学びに発展させることを期待して」と、こども環境学会から、学会賞も授与されました。

しかしながら、その一方で、保育・幼児教育施設からは、「幼児には、言葉と内容が難しい」「どのように活用したら良いのか分らない」など、敬遠する意見もありました。

そこで、2023年度は、2020年度から研究協力園として実践を続けている明星幼稚園の活動を基に手引書をまとめ、その他の研究協力園の実践も入れて、この学習材「続ふるさとのいろあそび」を作成いたしました。加えて、子どもたちの活動の様子を動画に記録し、この学習材と研究会HPをQRコードで繋ぎ、「写真や文章」と「動画(子どもたちの声や表情)」を一体的に見れるようにいたしました。

「地域の色・自分の色」研究会 https://museum.o-iro.jp/
代表　照山　龍治

もくじ

1 子どもたちの「やりたいこと」から広がる環境構成
① 別府市　別府大学明星幼稚園

2 幼稚園・こども園での活動事例
① 別府市 真愛幼稚園の活動事例
② 大分市 ふたばこども園の活動事例
③ 国東市 市立安岐中央幼稚園の活動事例

1 子どもたちの「やりたいこと」から広がる環境構成

① 別府市　別府大学 明星幼稚園

子どもの「やりたいこと」から広がる環境構成

1 いろ の えほん コーナー

絵本「ふるさとのたからもの」との出会い

「じごく の いろ きれ～い!」
「あか～～い!」「あおーい!」
「じごく の あかい どろ って、どんなの？」

2 いろ あそび
（地域素材の関心）

「血の池地獄の泥」との出会い

「じごく の どろって とけたアイスみたい!」
「ようふく にも いろ が ついた!」
→(どろ で ぬの を そめる)

3 いろ みつけ
（園庭の自然素材）

色水作りや色の変化との出会い

「はな や み にも いろ がある」
「いろみず に おんせんすい を くわえると いろ がかわる」
「ふしぎ!」

4 いろ こうじょう

「材料と場所・道具」との出会い

「ちのいけ の どろ で そめたよ!」
「きれいでしょ、いし や つち でつくった えのぐ」
「どろ を ぬった つくえ だよ」

5 いろ はくぶつかん

お家の人、地域の人との出会い

「みんな に みせた～い」
「おうち の ひと に みてもらおう!」
「おうち の ひと にプレゼントした～い!」

『じごくのどろ』であそびたい！

子どもたちは、『ふるさとのたからもの』の本に出会い、「地獄ってどんなところ？見てみたいね。」と関心を示した。そこで、保育者は、別府市内の地獄めぐりの様子をビデオに撮って子どもたちに紹介した。
「けむりがもくもくしてるね」
「いろんな色があるね」
「地獄には、お湯も泥もあるの？」
「地獄の泥ってどんなの？　見たーい！ さわれる？」
そこで、保育者が血の池地獄の赤い泥をいただき、子どもたちは泥遊びを体験することになった。

準備（じゅんび）するもの

- 血の池地獄の赤い泥（身近にある赤い泥やベンガラ等でも可）
- 広いシート（遊び場に敷く）
- タライ、バケツ
- 模造紙（手形足形あそび・絵を描く）
- カップやペットボトル、容器、筆
- 汚れてもいい服（着替え）

あそびかた

❶泥を瓶からタライに移す

血の池地獄の泥は、瓶に入れていただいた。
タライに移すところから遊びが始まる。
泥が園庭の土に混ざらないようにしたり、足裏でも泥を感じたりできるようにシートを敷く。

❷泥を使って、好きな遊びを楽しむ

手や足で泥を感じたり、
手足に泥を塗ったりして遊ぶ

模造紙に絵を描いたり
手形や足跡をつけたりして遊ぶ

見立てて遊ぶ

泥を使って、一人一人が面白い遊びを見付けて楽しむ。
～汚れてもいい服で遊ぶ。洗えば、色はだんだん落ちていくよ～

遊びの中では

初めて見る泥に

「ぬるぬるしてるね」「どろどろだね？」
「さわってみようか？」「とけたあいすだね」
「えのぐみたい」「てについちゃった」
手に色が付くことが「嬉しい、楽しい!!」

手にも足にも洋服にも塗ってみた !!

「ぬるぬるしてるけど、きもちいいね」「どろのてぶくろ」「どろのくつした」
自分の手足で泥の感触を試したり、感じたりしながらねっとりした
きめ細かな泥の感触を感じている。

てがた、あしあと
をつけたーい

見立てて遊ぶ

「ぼくはどろどろきんぐ!」「ちのいけじごくができたー!」
泥を使って自分が変身。

地獄めぐりの動画を見た子どもたちが、1 番にやりたかったことは、「泥を見たい」「泥に触りたい」ことであった。

大きなタライに泥を用意すると、指先だけでふれてみる。泥が滑らかで塗り広げられることに気付くと、腕や足にも塗り始める。また、着ている洋服、遊びに用いている道具にも着色できることに気付くと自分の衣服や容器への着色、ハンドペインティングや絵を描くことに夢中になる。

子どもたちが「溶けたアイス」「絵の具」と見立てた泥は、触る、塗る、描く、変身するなど触れて楽しむに十分な素材となった。

寒くなったよ！

冬の花や実で色水ができる？

園庭のヤブランが実をつけた。神棚に供える本榊の実はつぶれると赤紫色の色が出る。園庭にはパンジーやさざんかの花が咲いている。色水遊びの話をすると、「にんじんやピーマンはどんな色になる？」と、自ら材料を持ってくる子もいた。

あそびかた

❶草花や草の実をすり鉢やボールに入れてすりこ木や指を使って潰す
人参やピーマンは、おろし金で擦り下ろす

❷潰した花や実が入った容器に水を加える
すりおろした人参やピーマンは、茶こしでこす

❸できた色水を好きな容器に入れる

- 口の小さいペットボトル等には、じょうごを使って入れる。
- 潰れた花や実が入らないようにするには、茶こしを併せて使う。

準備するもの

- 各種ペットボトル、カップ、パック類
- すり鉢、すりこ木、ボール、ザル、じょうご、茶こし
- 草花　（パンジー・さざんか）
- 木の実（榊の実）
- 草の実（ヤブラン）、
- 野菜（人参・ピーマン・パプリカ）
- カボス、レモン
- 温泉水（酸性の水溶液）

❹色水にカボスやレモン、温泉水を加えて、色の変化を楽しむ

- アントシアンを含む草花や実は、柑橘系を加えると、色の変化を楽しめるので最盛期のカボスを準備する。

遊びの中では

太陽の光と関連づけて遊ぶ

おひさまをひとが
ブロックすると
いろはきえる

作業テーブルには白いビニールシートをかけておく。作った色水に太陽光線が当たると、白いシートにその色を映す。「緑はピーマン色、オレンジは人参色になった」と、材料と色水の色を関係付ける。ピーマンや人参の香りたっぷりの色水は、シートに色を付ける。

「ここ見て。オレンジ色が映っているよ」

「でも、お日様をブロックしたら色が消えるよ」光線の有無により色の表れ方を体を使って確かめる。

色水に他のものを加えて遊ぶ ～カボスやレモン、温泉水～

カボスをいれると
こいピンクになった

きれいだね。どうして
こんないろになったの？
わたしも やってみたい！

パンジーをつぶすと
あおいろの いろみず
になったよ。

おんせんすいは、
むらさきいろ にかわったよ

O児が試した色の変化を目にしたA児。色の違い（変化）を確かめたくなったのであろう。

自分たちが持ち寄った人参やピーマンが、それぞれオレンジ色や緑色の色水となり「もとと同じ色」「きれいな色」と野菜の色素を再確認、鮮明な色に驚きの声もあがった。

作業台に白いシートを置いたことで、子どもたちは、太陽の光が通した色水の色に気付く。容器の色水より少し薄い色、その周囲は光が入りキラキラとする様に子どもたちは、「ここに色がある、光もある」と、陽ざしの中で色と光を見つける。

卵パックにパンジーの花の色水を作ったO児。カボスや温泉水を加え、鮮やかな色の変化を発見して保育者に伝える。それを聞いたA児は、自分も確かめたくなる。探究が広がる。

『じごくのどろ』でそめたい！プレゼントしたいね

10 月 広い布の泥染め

昨年の年長組のいろあそびを見て、「泥染めは、いつするの？早くしたいね。」と子どもたちは楽しみにしていた。１回目は、広い布に割り箸やビー玉を挟んでゴムで巻く泥染めを体験。縛った部分が白く模様となって残る泥染めに「ひまわり」「ダイヤモンドみたい」と歓声をあげる。

11 月になり、お家の方に感謝の思いを伝える勤労感謝の日が近づくと、「先生、泥染めをしたプレゼントをしようよ」と子どもたちからアイディアが出された。「お母さん、お父さんが毎日使ってくれるのがいい。」という子どもたちの願いが出される中、保育者は無地の巾着袋を用意した。

あそびかた

❶染め布にビー玉やペットボトルキャップ、割り箸などを挟んでゴムでしばる

●ゴムを何重にも巻いてしばる方が白い部分が残り、鮮やかな模様となる。

準備（じゅんび）するもの

- 布（※今回は綿製の巾着袋）
- 挟む物（ビー玉･割り箸･ペットボトルキャップ等）
- 輪ゴム　●バケツ　・タライ
- 洗濯ばさみ　（干す時に使う）　●はさみ
- 血の池地獄の赤い泥（身近にある赤い泥やベンガラ等でも可）

❷ビー玉などを挟んだ布を泥につける

●3～4時間ほど泥につける。
●温泉水が染色剤の働きをするので泥とよく混ぜておく。
●キャップやビー玉を挟んだ隙間にも泥を付けて色が付くようにする。

❸水で洗って泥を落とす。泥が落ちてきたら、挟んだものを外す

●タライの中、または流水で洗うが、洗い出された泥が溜るので排水に留意する。
●ゴムが外れにくい場合がある。保育者が少し手伝う場面。

❹陽当たりが良い所に干す

●干した後、染まった色や模様などあそびの振り返りをする。

遊びの中では

巾着を泥染めする

これを どろ で そめるよ

わりばし を いれたいけど むずかしいなぁ

ビーだま いっぱい はさんだ

きれいに そまってる といいなぁ

「プレゼント」の気持ちで、挟む材料を選んだり、縛り方を工夫したりして泥染めの準備をする。

染まった布の形や色のことを話し合う

みんなの巾着を干すと、模様や色について気付いたことや、感じたことが次々に語られる。

「ちっちゃい ふくろ の なかに ダイヤモンドがあるみたい」
「やった、ひまわり の かたち」
「どろは オレンジだけど、そめたらちゃいろに なっちゃった」
「たいようが、あたっているところは、あかるい いろ、かげのところは、くらいね」
「おひさまが あたるほうは、いろが うすくみえるね」

おかあさん、かいものすきだから よろこぶね！

１回目の泥染めでできた模様を「ダイヤモンドみたい」と喜んだ子どもたち。お家の人にも楽しさや面白さを伝えたいと思ったのであろう、「泥染めした物をプレゼントしたい」と保育者に思いを伝えてきた。

保育者は、小さな無地の巾着を準備する。

巾着のサイズが小さくて、割り箸がはみ出して縛れないＡ児は、割り箸を短くするとゴムが巻けることに気付いた。

泥を洗い落として、巾着をフェンスに干すと、振り返りが始まる。前回の経験を生かそうとビー玉を巻いたＹ児は、「やった、ひまわりのかたち」と、放射状の模様ができたことを嬉しがる。

「泥はオレンジ色、染めたら茶色になった」と、Ｈ児は染める前後の色の違いに着目していた。

『いろこうじょう』であそびたい！

地獄の泥遊びを楽しんだ子どもたちは、「色の遊びをもっとやりたい」「泥を塗ってみたい」と、保育者に伝える。

また、「ふるさとのたからもの」の本を見ながら「石や土で絵の具ができるのかな？」「草や花から色を出せる？」と確かめたいことを話してくる

そこで、一人一人の子どもの「つくりたいもの」「やってみたいこと」を聞いて、〖えのぐやさん〗〖ペンキやさん〗〖そめものやさん〗の〖いろこうじょう〗の環境を構成することにした。

〖えのぐやさん〗

「山の石や土で絵の具をつくりたい」

つくりかた

❶石や土をビニール袋か厚い紙袋に入れて、新聞にはさむ

●印刷用紙を梱包している用紙を二重にして、石や土を入れる袋を作る。

❷袋に入った石や土を新聞の上から金づちでたたいて細かくする

●伽藍岳（火山）で拾った白い石は、砕くのに適した柔らかな石。
●金づちのヘッドに近い所を持って、低い位置でたたく。
●土や石が飛び出さないように新聞に挟んでたたく。

❸石や土が細かくなったら、茶こしやふるいに入れてふるう

●ふるいから落ちた石や土は、サラサラしたとても細かな粒子になっている。

準備（じゅんび）するもの

- 柔らかな白い石と黄色の土
- 金づち
- ふるい（茶こし）
- 容器
- 新聞
- 厚みのあるビニール袋かまたは紙袋
- 糊
- 筆
- 絵を描く用紙
- パレット、筆

❹サラサラになった石や土の粒子を容器に入れる。《絵の具のもと》のできあがり

遊びの中では

絵の具ができた

「ドロドロしてきた！」
「ザラザラしてるよ！」
「え が かけるかな？」

サラサラになった土や石の粒子に水と糊を加えて筆で混ぜる。糊は接着剤の役目をする。

石や土の絵の具で絵を描く

黄色い土は黄土色の絵の具に、白い土は白い絵の具になった。

絵の具に色の名前をつける

「こうひーえのぐ「どろえのぐ」と命名

作り方を友達に伝える ～振り返りの場で～

つち から できた
えのぐ の もとだよ

2色を組み合わせる、1色でまとめる、色の違う用紙で描くなどして、自分で作った絵の具で描くことを楽しむ。

柔らかい石は、園児でも砕くことができ、砕いた石や土を「ふるい」でふるうとサラサラの粒になることに子どもたちは驚いた。粉を瓶に入れ大事そうに抱えていた。サラサラになった粉に糊と水を加え、描いてみると絵の具のように着色できた。「絵が描けるよ、ポケモン描きたい」と、石が絵の具になることを喜び、画面いっぱいに好きな絵を描いていく。「乾くと色が薄くなるね」とK児は、色の変化にも着目していた。

『いろこうじょう』であそびたい！

血の池地獄の泥を手足に塗ったり、泥で文字を描いたりする遊びを楽しんできた子どもたち。

「ふるさとのたからもの」の本で、泥が柱の色塗りに使われたこと、「ふるさとのいろあそび」で昨年の年長組がお守りを作ったことを知った。

「わたしたち、大きくて広い板に泥を塗りたいね」「泥塗りができたらみんなで何か作りたいね」と、遊びたい内容を保育者に伝える。

保育者は、大きさや長さの異なる板や角材を用意することにした。

〖ペンキやさん〗

「大きくて広い板に泥を塗りたいね」

つくりかた

❶好きな大きさの木材や木片、角材等を選ぶ
一緒に作りたい友達と話し合って選ぶ

大きくて広い木質の板

❷刷毛やローラーを使って木材や石に泥を塗る

- 泥が接着しやすいように膠や糊を少量加えておく。
- 乾燥させる時は、ブロックの上に置いたり、壁に立てかけたりする。

❸大小の木材を組み合わせたり、木片からイメージしたりして好きな物を作る

- 泥を塗った大きい板や角材を「組み合わせて何か作りたい」と願いをもつことが予想される。木工ボンドや飾りのピーズ等を使う。
- 小さな木片や石は、一人一人がイメージした物を作る。

準備（じゅんび）するもの

- 木質の板　各種 、角材
- 小石
- 木工用ボンド
- 膠（にかわ）
- ローラー、刷毛、筆
- トレー
- シート
- 飾り（自然物）
- 血の池地獄の赤い泥
  （身近にある赤い泥やベンガラ等でも可）

遊びの中では

思い切り、たっぷり塗る

「ほんもののペンきやさん、かっこいい！」

ベタベタしてるね！

「ちいさい き もぬれるよ！」
「いし にも つくよ！」
「なにつくる？」

「さぁ、塗ってみよう」上ぐつも靴下も脱ぎ裸足でシートに乗ってくる1児。
体ごとペンキやさんになりきる。広い面を存分に塗り、その姿を「かっこいい!」と自分に満足する。

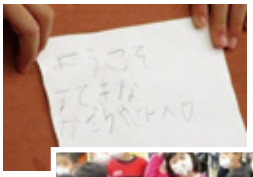
組み合わせて作る

大きくて広い板、角材にも泥を塗った子どもたちは、角材を脚にして机と飾り台を作る。
「地獄の泥の机、かわいくしてあげよう」
持ち寄った貝殻、ビーズなどを縁に飾り始める

「看板づくり」みんなに呼びかけて

これをつかって
かんばん にしない？

かんばん を つくります。
みんなの え をかざりませんか？



それ
いいね！

「いろこうじょう」で作った作品を展示するお部屋（みんなのたからものびじゅつかん）の入口に設置。

「大きくて広い板に泥を塗りたい」の声は、泥の感触をもう一度味わいたい、塗ったもので何かを作りたい、子どもたちのそんな願いからであったと思われる。子どもたちは、泥塗りに夢中になった後、板を組み合わせて机を作ったり、作品展示の看板に利用したりする思いをふくらませる。大きい板や角材は、「泥ぬりを存分に楽しむ」「みんなで一緒に作る」という子どもの思いを叶えた。一方、小さな木片や石は、泥を塗ってビーズなどの飾りをつけて、飾りや置物として一人一人の楽しみを満たした。

『はくぶつかん』をつくろうよ！
（びじゅつかん）

子どもたちは、４つの工場（ぺんきやさん、絵の具やさん、いろみず実験コーナー、染め物やさん）で遊ぶ中、自分たちの遊びを紹介したり、交流し合ったりしながら色のもつ不思議や楽しさに夢中になっていた。ある日の振り返りの場で、「ぺんきやさん」から提案があった。「おうちの人に作った物を見てもらいたい。『ようこそすてきなかざりやさんへ』と看板を書きたい。みんなも見てもらいませんか。」という呼びかけであった。すると、「それ、いいね。」とみんなも同意し、「いろあそび」の作品をお家の人に紹介する美術展を開くことになった。

『とくべつなたからもの　びじゅつかん』と名付けられ、ふじ組、さくら組、年長組最後の参観日に開かれることになった。

空き教室に展示。４つのコーナー（工場）で遊んだもの・作ったものを紹介。道具や方法などを伝えたい思いが強く「言葉を書く」と説明を添える子も見られた。

遊びをお家の人に紹介する

《子どもの姿から》「とくべつなたからもの　びじゅつかん」

❶自分が作った絵の具の紹介。❷木片の飾り物の紹介。

美術館の会場では、「何を使って、どんな方法で作ったのか」をお家の人に紹介する。お家の人が熱心に聞いてくれることでますます丁寧に説明する姿が見られ、「私だけが知ってるよ」と言わんばかり。自分で遊びを選び、やりたいことや気になったことを納得いくまで楽しんだ子どもたち、たくさんの気付きやがんばり、楽しかったことをお家の方と共有した。

《保護者の声》

血の池地獄に伽藍岳、別府に住んでいながらなかなか見たり行ったりすることのない場所を遊びを通して知ることができとてもよいことだと思いました。石を砕いて絵の具、花をつぶして色水を作るなどたくさんの発見や驚きが子どもの心の中に一つ一つ起こって、それを大切な仲間と共有し、家族にも見せて喜び合うことができたこと、本当にすばらしい活動だと思いました。

2 幼稚園・こども園での活動事例

① 真愛幼稚園（別府市）「ぼくたち、わたしたち、伝説になるね♪」

血の池地獄の赤い泥で、初めての泥染め

真愛幼稚園は、自ら考え、やってみるということを中心に置き、キリスト教幼児教育を通して、人・自然・地域とともに歩み続けている別府市内では長い歴史を持つ幼稚園です。

今回の活動は、血の池地獄の泥が染料などに用いられたことは知っていましたが、研究会からの声掛けもあって始めました。

泥の感触や臭いの体験、泥染めという共同作業、子どもたちが、各々の工夫を凝らして、自分だけの作品を作る。この経験を通して、子どもたちが満足感と達成感を分かち合えることを願っています。

「ドロドロ」「えのぐ?」「ケチャップみたい」
「チョコだよ」「てつぼう の におい」「ち のにおい」
「ぬるぬる」「ざらざら」

※1「血の池地獄に行ったことある！」と言っていた子どもたち。ガラス瓶の中に入っている血の池地獄の泥を見て「ケチャップみたい」「チョコだよ」の声もあったけど、ふたを開けてにおいを嗅ぐと、「臭い」「鉄棒のにおいがする」「血の匂いだよ」としかめっ面。次に触ってみる。冷たい泥の中に葉っぱが入っているのにも気づく。泥だけを触ってみる。「ぬるぬる」「ざらざら」と違う意見も出てくる。泥の上と下では感覚が違うことに気づく。

わたし、もよう を いっぱい つけたい。
ふた を いっぱい いれるよ！

※2 広げてみると、思うように模様が出来ていなかった。布地をもっと強く縛らないと白い部分が出ないことに気づく。その時、園長先生から「もっと長～い布で染めてみない？」の提案がありました。保育者としても、子どもたちが、次はどうするのかとても楽しみでした。

「できた！ いろ がついた」
「しろい ところもある」
「まるい わ ができた」

２回目の泥染め

２回目の泥染めです。長い布を使って、一つはひもで縛るだけ、もう一つは様々なもの入れて縛りました。それを、血の池地獄の赤い泥につけました。子どもたちは、互いに見せあいながら、どんな姿になるのかと、とても楽しみにしている様子でした。染めあがったものを大型遊具やブランコにかけると歓声が上がり、「この布を何に使うの？」という保育者の質問に、「クリスマスの服につかおう」「砂漠になるかな」「馬小屋の壁？」などと、子どもたちは答えていました。

「ひも だけなら、たんぽぽさん も できるかな～？」
「きつく しばるのは むりじゃ？」
「へび みたい になるかな」

「クリスマスの ふく につかおう」
「さばく になるかな」
「うまごや の かべ？」

ページェント（聖劇）に使おう

園の中から、12 月 2 日に染めた長い布は、クリスマスの衣装にしてはどうかという意見が出ました。「この色の服は博士じゃないよな」「王さまも違うよ」「ヨセフじゃない？」「天使もちがうね」という議論があり、落ち着いたのが宿屋の主人の服。それを聞いた宿屋の主人役のＲくんも嬉しそうでした。

さらに、「長いのは、砂漠みたいだね」「踏んでいいのかな」「いいんじゃね」といった議論もあって、砂漠に見立てた大道具となっていきました

クリスマスかいの
えんちょうせんせいのあいさつ
「クリスマス の おいわい を
しましょう」

「ながい ぬの、
さばく みたいだね」
「ふんで いいのかな」
「いいんじゃね」

ちいさな やど ですが、
おとまり ください！

— 砂漠に見立てた広い布 —

「ぼくたち、わたしたち、伝説（でんせつ）になるね」

クリスマス ページェント（聖劇）の成功もあって、次に、子どもたちが、卒園アルバムを入れるバッグを染めることになりました。

最初は、長い布を切ってバッグにするという案も出ていましたが、園長先生から、「長い布はみんなが卒園してもずっと幼稚園で使わせてもらえないだろうか」との提案もあって、長い布はそのまま残すことになりました。それを聞いた子どもたちは、「ももさん（年少）やたんぽぽさん（年中）は、よろこんでつかってくれるかな」「わたしたちが作ったの、ずっとここにあるん？」「ぼくたち、伝説になったな」と自分たちの作った作品が幼稚園に残り続けることを、とても喜んでいました。

（まとめ）庄司園長～遊びを通して～

- 今年の年長クラスはなんでも「やってみる」から始まりました。「こうしたら面白い」を想像して作り上げ、フェンスにかけて干していると、年少児たちが憧れの目でその姿を見ていました。これから受け継がれていく、まさに「伝説」が生まれた瞬間に立ち会えたという喜びがありました。
- 素材を生かして、自分たちが工夫して作り上げたバッグは卒園後、教会学校に出席したときの讃美歌入れとして用いられるようになりました。
- 隣接した別府市中央公会堂の館長さんに泥染めバッグをお届けし、血の池地獄の泥で染めたことを伝えると、驚きもありましたが、毎年増えていくことを楽しみしているとのことでした。このように、公会堂にも毎年お届けしていけば、地域との関わりがさらに深まっていくと思われます。
- 「いろあそび」の一つ効果として、子どもたちの発想が豊かになり、活動の展開があり、幼稚園の新しい伝統になるきっかけともなり、地域とのかかわりを深めました。その中で、何よりも、子どもたち自身の成長に大きく役立つ体験になったことが嬉しく思います。
- 保育者たちも、今後の園の活動に向けて、研修の一環として、保育後に、自らバッグを泥染めにするという体験もできました。
- 卒園後、卒園生が集まるイースターの日に、子どもたちが血の池地獄の泥染めで作ったバッグに讃美歌を入れて持ってきた姿を見て、これから毎年、この「いろあそび」で作ったバッグを持ってくるのだろうと想像し、Tくんが何気なく言った「ぼくたち、でんせつになるな」ということを実感できました。

② ふたばこども園（大分市）

魔法の泥で、絞り染め

大分県認定こども園連合会の大会で、研究会から、血の池地獄の泥で「色染め」ができるとお聞きし、「ふたばこども園」でも取り組んでみたいと考えました。

そして、血の池地獄の赤い泥をもらい、子どもたちが、どのように遊ぶのかとワクワクしながら取り組みました。

「ちゃいろ」「あか」
「あかちゃいろ」

「おんせん！ はいれる？」
「あついのが、たえられる
ひと は はいれるかもね」

※1 血の池地獄の赤い泥で染めた布を子どもたちに見せて、「ビー玉などを布に巻き赤い泥に浸けると綺麗な模様に染まるよ」と話し、「血の池地獄を知っている？」と聞いたところ、「行ったことある」と答えた子どもと、「知らない」という子どもに分かれました。そこで、子どもたちに、血の池地獄のホームページを見せながら、「地獄は温泉の出口ですよ」、「１００度なので入ることはできないよ」などと話すと、子どもたちに、血の池地獄に対する親しみがわいてきたように見えました。

※2 ビー玉、ドングリ、割りばし、ひも（太･細）輪ゴム、結束バンドなどを用意すると、子どもたちは、「どうなるんかな？」などと言いながら、好きなものを選んで、思い思いに布に巻いていきました。

「あおい ビーだま にしよう」「いっぱい つけたい」
「ここむすびたいから、てつだって」

（学びのポイント）
子どもたちは、自分で、好きな材料を選べることで、意欲をもってのぞめたようです。また、自分で巻いたりするのが不得手な子どもは、友だちに手伝ってもらったり、得意な子どもは、すすんで友だちを手伝ったりする姿が見られました。

「こんなに いっぱい つけた」
「テルテルぼうず になったよ」
「どう なるんかな？」

染(そ)まったかな？

※3 泥染めをする中で、血の池地獄の赤い泥の匂いを嗅いでみたり、おそるおそる触ってみたり、友だちと付け合ってみたりというような行動も見られました。

「はなぢ の においがする」
「チョコレートみたい」

てがた
つけてみたい！

かわいたら はだ と おなじいろ になったよ

（学びのポイント）
血の池地獄の泥という「初めて触れるもの」を、これまでの経験も思い出しながら、理解しようとする姿が見られました。そして、時間の経過とともに、血の池地獄の泥が変化していくことにも気づくことができたようでした。

※4 その後、「絞り染め」の用意をした布を、血の池地獄の赤い泥に浸け、数時間おいた後に取り出し、水で洗いました。

しぼったら
ミノムシみたい
になった

「ほんとうに
できているかな？」
「どんなふうに
なってるかな？」

染(そ)まったよ！

「まる と しかく があるよ」
「おおきい ぶどう みたい」
「クレーター みたい」
「にわとり に みえてきた」

（学びのポイント）
布が染まった様子をながめながら、出来た模様を「おおきいぶどうみたい」など、自分なりに何かに例えて表現しようとする姿がありました。また、友だちと模様を見比べながら、伝え合う姿も見られました。その中で、保育者として興味深かったのは、布を開いた直後と、時間が経過した後では、子どもたちの見え方が変わったようで、表現に変化が出ていたということでした。

「こっちは、しろ が きれいに でてる。こっちは でてないよ。なんで かな？」
「ひも を つよく ギュって しばった からじゃない？」

（学びのポイント）
布染めの様子を眺めながら、はっきりと白が浮き出ている部分とうっすら白くなっている部分など、同じ白でも色合いが違うことに気づき、「なぜ？」と発言する姿も見られました。
このように、友だちと疑問を共有し、互いに推測し合い、探ろうとする姿もありました。

先生と一緒に、振り返りミーティング

「どろみず みたい だった」
「ぬるぬるして きもち わるかった」
「てつぼう みたいな にお い もした。
あとで におってみよう」

※5 泥染めの後、クラス毎に、泥染めの振り返りをしました。その中では、触った時の感触やにおいなど、子どもたちが感じたことを、自分たちの言葉で、楽しそうに話していました。

「くさった トウガラシ みたいな
にお い だった」
「うめぼし みたいな にお い も」
「なめらか だったよ」

（学びのポイント）
ふたばこども園では、毎日遊びや活動の後、「振り返りミーティング」を行なっています。
今日何をしたのか、何を感じたのか、気づいたことや知ったこと、うまくいったことは何か、うまくいかなかったことは何か、次はどうしていくかなどを振り返り、次につなげる習慣をつくっています。
その中で、子どもたちは、今日の自分を振り返ることで自分を客観的に見つめることができ、また、友だちやクラスのみんなのことを知り、友だちや集団へ思いをはせたり、集団の一員としての自分はどうするか考えることができるのです。

（まとめ）芦田主幹保育教諭
子どもたちは、当初、泥染めを見て、「やってみたい！」と、この活動をとても楽しみにしていました。活動が始まると、布にいろんなものを入れて「絞りぞめ」の準備をしていく中で、「結ぶ・包む」という活動に自分なりの工夫を加えながら楽しんでいる姿が見られました。
血の池地獄の赤い泥を前にして、園内の泥とは違う感触とにおいを感じたようです。鼻をつまみながらも、泥の感触やにおいを「それぞれの言葉で表現する」ことにも楽しんでいました。
布を染める時には、本当に色がつくのかと疑念を抱く姿もありましたが、洗って広げてみて、ようやく泥染めの“布を結ぶ、泥に浸ける、洗い・広げる”の一連の活動がつながったようでした。
染まった布を見て、はじめは１枚の布にできた白抜きの一つ一つに注目しているようでしたが、じっくりと布全体を見ていくことで見えてきた模様を表現するという姿に変化する様子が見られました。
子どもたちが、泥の感触やにおい、偶然できる形などに、強い関心を示し、友だちと一緒に楽しんでいる姿をみて、これから、身近にある自然の素材を、色や形から関心を持ち、遊びや生活の中で活用して行くということや遊びや学びに取り入れていくことが期待できると思いました。

③ 安岐中央幼稚園（国東市）

小学校の活動を幼稚園に繋ぐ（校長先生から別府調べのお話）

別府市立鶴見小学校４年生と国東市立安岐中央小学校５年生の「ふるさとのたからもの」の交流のお話や、「ふるさとのいろあそび」の本の紹介をすると、「めったにできない貴重な体験を、ぜひ幼稚園でもしたい」ということになりました。

そして、幼小が連携した血の池地獄の泥遊びが、安岐中央幼稚園で始まりました。

「ちのいけ？」
「じごく」「おに」
「あかは、ちのいろ？」
「こわい・・・」

※1「別府を知ってる？」「地獄とか温泉は？」、それに対して「知らない」「別府タワー」「ゆめタウンのところ」など。そこで、５年生のお兄さん・お姉さんの別府調べを見せながら、校長先生が、血の池地獄の泥で布を染めたことを紹介しました。その中、「血」という言葉で怖がっていた子どもたちも、ペットボトルに沈んだ泥を見せて、血の池地獄の赤色のひみつは「この泥」と説明すると安心したようすでした。

「てつぼう の におい」
「すべり台のにおい」
「この どろで、てつぼう できてるのかな？」

※2 血の池地獄の赤い泥で字や絵を描いたり、布を染めたりすることができることを知り、自分たちもやってみたくなったようです。人差し指に泥水をつけて、匂ってみたり、布で拭いたりする中で絵を描きはじめました。

「えのぐ みたい」
「チョコ の いろ」

※3 鬼、アンパンマン、ねこ、ハート、おばけ…。字も書いていました。泥は、「きめが細かい！」だから、「指とつめの間に浸み込んでくる」と先生たちもいっしょに楽しんでいました。

できあがり！

給食の三角巾で、泥染めに挑戦

５年生のお兄さん･お姉さんが地獄の赤い泥で染めた布を見せて、「次は、泥染めに挑戦です」、「三角巾を泥で染めて、給食の時に頭に巻いて使いますよ」と話すと、子どもたちは、すごくやる気を出して、血の池地獄の赤い泥で「しぼりぞめ」を始めました。

どろ の いけ に つける？！

もよう、どうやって つけるん？

※4 割り箸、布、ペットボトルの蓋、ゴムを準備して、布に巻き付ける方法を説明しました。
「布に蓋をかぶせて、ゴムをかぶせて、ゴムを引っ張りながらバッテンをつくって、また蓋にかぶせる。何回かくり返してできあがりです」

「マシュマロ みたい」
「キャンディー みたい」
「もよう、いっぱい つけたい」

※5 一人５～６個、ペットボトルの蓋をつけることができました。「魔法の泥にどっぷりつけて…」

どろん！
と ばける

「まほう を かけるよ」
「きれいに そまれ」
「どんな もよう に なるか たのしみだね」

※6「一人ひとりちがった世界に一つだけの三角巾ができますよ。うまく染まるように、魔法をかけましょう！」と先生の声掛け。

泥染め、できたかな？

数日後、血の池地獄の赤い泥につけていた布を取り出し、水で洗って干しました。魔法の泥に漬けて、魔法をかけた布は、うまく染まっているのかな。

どんな模様がついているのかな。

「てつ の におい」
「はなぢ の におい」
「たらい が ちのいけじごく！！」
「どうかな？」
「たのしみ！たのしみ！」

※7 布を取り出し、たらいで洗うとき、泥を落とすときに、手触りやにおいを感じていました。

「はなび みたい」「まるい もよう」
「シャボン だま」「おうぎ みたい」
「め と はな」「アサガオ みたい」

※8 一人ひとりちがった世界に一つだけの三角巾ができました。魔法の泥で、白い三角巾は、泥の丸い模様の三角巾に、どろんと化けました！魔法はうまくかかったようです。

できたよ！さあ、泥染め三角巾をつけて給食の準備だ！

「みんな ちがって みんな いいよ！」
「いろんな もようで きれい！」
「できあがり！！」

赤く染まった三角巾を頭に巻いて、給食の準備をする子どもたちです。

（まとめ）河野園長

「別府」や「地獄」や「ふるさと」といった言葉の意味はわからない子どもたちですが、色や泥、におい等は体感的に学びの材料になりました。色から不思議や感動が生まれました。今回、５年生の交流から、幼稚園児も、「血の池地獄の泥」という「別府のたからもの」で貴重な体験ができました。血の池地獄の泥染めも七島藺も、昔々の懐かしいものというだけでなく、先人の知恵や伝統文化を継承することにもつながると感じました。自分たちの身近にも不思議で、楽しめる材料がきっとあるとワクワクします。

むすびに

この学習材「続ふるさとのいろあそび」は、2020年度から当研究会の活動にご協力いただいている明星幼稚園のご協力により、実践記録「ふるさとのいろあそび」の手順書としてまとめたものです。

その中には、活動にご賛同をいただき、独自の活動を行っている別府市の真愛幼稚園や大分市のふたばこども園、国東市の安岐中央幼稚園の活動記録も掲載いたしました。

そして、できる限り、子どもたちの活動の様子を見ていただきたいと考え、QRコードで研究会のホームページ「地域の色・自分の色博物館にようこそ」と繋いで、学習コンテンツに動画も組み込みました。

このように多くの人たちのご協力によりこの学習材は、実態に即した手順書、そして、活動記録としてまとめることができました。中でも、動画を活用することにより、紙の本だけでは十分に伝えることができない子どもたちの姿や活動の様子も分かり易く伝えることもできたのではないかと考えています。

そのため、この本を手に取られた方には、ご協力いただいた多くの人たちの思いをくみ取り、是非、この本や、QRコードで繋がった研究会のホームページを活用していただき、地域の未来を担う子どもたちの保育や教育にご活用いただければと心から願っています。

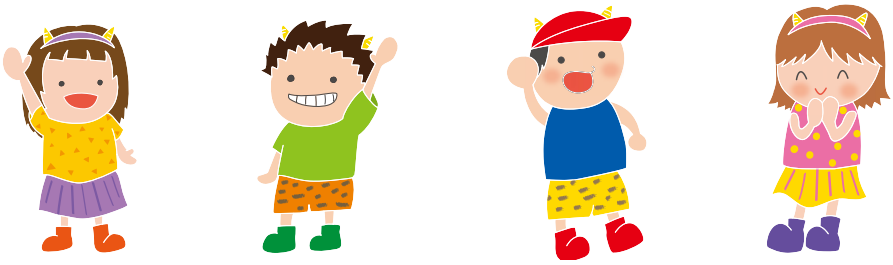
なお、作成に当たり、この活動をご支援いただきました公益財団法人前川財団をはじめ、実践と原稿づくり、動画編集に多大なるご協力をいただいた関係園の園長や先生方、そして、大変お忙しい中を、ご指導いただきました学習院大学教授　秋田喜代美先生には心から感謝申し上げ、研究会として、むすびの言葉といたします。

「地域の色・自分の色」研究会

「地域の色・自分の色」研究会		代　表　照山　龍治 副代表　木村　典之 会　員　幸野　洋子 山﨑　朱実 塩月　孝子（事務局）
監　修	学習院大学 (東京大学名誉教授)	教　授　秋田　喜代美
協　力	学校法人 別府大学 明星幼稚園	園　長　岩光　一郎、主任教諭　大井　万由子 教　諭　越智　亜也、教　諭　安部　志歩 教　諭　長野　茉優
	学校法人 別府真愛学園 真愛幼稚園	園　長　庄司　宜充 主任教諭　庄司　真紀、教　諭　永嶋　莉奈
	有限会社 大分ふたば ふたばこども園	園　長　吉田　茂、主幹保育教諭　芦田　菜美 保育教諭　小中　亜未、保育教諭　吉田　謙伸
	国東市立 安岐中央幼稚園	園　長　河野　智（安岐中央小学校 校長） 主任教諭　佐藤　留美、教　諭　小山田　英理子 臨時教諭　鹿上　麻里子、臨時教諭　萱島　好美

実践園　別府大学明星幼稚園、真愛幼稚園、ふたばこども園、国東市立安岐中央幼稚園

挿　絵　後藤　友実子　　題　字　大塚伊都子
印　刷　株式会社　明文堂印刷
発行日　２０２３年６月１日



「地域の色・自分の色」研究会